

## 日本菌学会会長に選出されて

日本菌学会会長 原 田 幸 雄

(平成11年度～12年度)



この度会員諸氏のご推挙により平成11年度～12年度日本菌学会会長に選任されました。微力ながら全力でこの大任に取り組む所存でございます。

日本菌学会は1956年の創設以来これまで22期にわたり歴代会長を中心に会員諸氏の絶えざる研鑽と協調の結果、発展の一途をたどってまいりました。

本会は1,500名余りの会員を擁し、英文誌「Mycoscience」、和文誌「日本菌学会会報」をそれぞれ年4回発行するかたわら、年次大会、菌類採集会、国際菌学シンポジウムの開催などの行事を行ってまいりました。また東北支部、関東支部、西日本支部の活動も年々盛んになっております。本年の第43回日本菌学会大会はたまたま私の所属する弘前大学において5月21日～23日開催の予定で、現在研究発表のプログラム編成等の準備を進めております。当地で13年前開催された第30回大会時と比較すると、研究発表の演題は往時の86題から112題へと着

実に増加しました。多彩な菌類を対象に様々な研究領域でユニークな研究が展開されており、特に分子系統・進化に関する発表の増加が目立ちます。バイオテクノロジー発展の一翼を担う会員諸氏の活躍振りをうかがうことができ嬉しいことであります。

1994年、宮治 誠会長の時代に「日本菌学会会報」から分離・独立して刊行された「Mycoscience」は順調に成長して既に5年を経過しました。そして北本 豊前会長の時代に国際誌としての一層の評価を期して本年度から隔月出版とする方針が決定されております。この実現には会員諸氏からの積極のご投稿が不可欠であります。また編集委員会においては編集体制の見直し、強化が急務の課題と考えられます。英文誌・和文誌を問わず学会誌の充実こそ学会員最大の責務、また学会員の受ける最大の恩恵ではないでしょうか。この目的に向かって鋭意努力する所存でございます。

本学会の最近の成果の1つに「菌学用語集」(1996)の発行があります。日本菌学会の関係者が30年に及ぶ準備期間を経て完成した本書は、菌学および関連領域でよく使用される用語5,000件余りを収録した英和および和英形式の辞典(A4判86頁)であります。会員を中心にこれまで約900冊頒布されましたが、年々新たな購入申込みがあるのは菌学に志す若い研究者が育っている喜ばしい証拠であります。また、本書に対する感想・要望なども寄せられ、改訂版への強い期待が感じられます。菌学の普及、隆盛には菌学関係の重要な出版物を若い人達がたやすく入手あるいは利用できる環境を整えることが大事であります。このような面でも学会の果たしうる役割を模索したいと考えております。因みに、最近本学会員が多年のご研究の成果を専門書におまとめになり、相次いで出版公表されておりますのは菌学の進歩に大いに貢献するものでご同慶の至りに存じます。私の知る範囲でも野村幸彦著「日本産ウドノコ菌科の分類学的研究」(1997)、渡邊恒雄著「植物土壌病害の事典」(1998)、山本幸憲著「図説日本の変形菌」(1998)などがございました。このようなお仕事が今後も陸続として現れてくることを切に望んでおります。

1993年宮治 誠会長の発案で始まった国際菌学シンポジウムは昨年11月には第6回を迎え、「'98日英国際菌学シンポジウム」として千葉大学で開催されました。英国菌学会からは Alan Rayner 会長, Martyn Ainsworth 副会長を含む7名の著名な研究者が参加され、それぞれ興味深い講演をなされました。このシンポジウムの主旨について、当時の宮治会長は、「毎年世界の著名な研究者を5名前後招待し、身近で十分議論できる機会は特に若い研究者にとって掛け替えのない経験となるでしょう。…その効果は測り知れません。」と述べておられます。恒例の菌類採集会(フォーレー)も同様に将来の菌学会を見据えた地道な活動の1つです。昨年9月青森県八甲田山で行われた採集会には遠隔地にもかかわらず、北は北海道から南は沖縄に至る各地から80数名の参加者がありました。シンポジウムやフォーレーで播かれた多くの種子はやがて方々で芽を出し、成長し、花咲いて菌学会の未来を支え続けるに違いありません。

以上会長就任にあたり学会の最近の活動を振りかえりながら将来への展望とささやかな抱負を述べさせていただきました。皆様のご支援、ご鞭撻をお願いしてご挨拶と致します。